

越前の三位通盛の卿の侍に、君太滝口時員といふ者あり。北の方の御舟に参って申しけるは、「君は湊川のしもにて、かたき七騎が中にとりこめられて、うたれさせ給ひ候ひぬ。時員も一所でいかにもなり、最後の御供仕るべう候へども、かねてよりおほせ候ひしは、『通盛いかになるとも、なんぢはいのちをすつべからず。いかにもしてながらへて、北の方の御ゆくゑをもたづね参らせよ』と仰せ候ひしあひだ、かひなきいのち生きて、つれなうこそこれまでのがれ参って候へ」と申しけれども、北の方とかうの返事にもおよび給はず、ひきかづいてぞふし給ふ。一定うたれぬと聞き給へども、もしひが事にてもやあるらん、生きてかへらるる事もやと、二三日はあからさまに出でたる人をまつ心地しておはしけるが、四五日も過ぎしかば、もしやのたのみもよわりはてて、いとど心ばそうぞなれける。ただ一人付き奉りたりけるめのとの女房も、同じ枕にふし沈みにけり。

北の方、かくと聞こえし七日の日の暮れほどより、十三日の夜までは起きも上がり給はず。明くれば十四日、八島へ着かんずる宵うち過ぐるまでふし給ひたりけるが、ふけゆくまに船のうちもしづまりければ、北の方、めのとの女房にのたまひけるは、「このほどは、三位討たれぬと聞きつれども、まことと思はでありつるが、この暮れほどより、さもあるらんと思ひさだめてあるぞとよ。人ごとに湊川とかやの下にて討たれにしとはいへども、そののち生きてあひたりと言ふ者は一人もなし。あすうち出でんとての夜、あからさなる所にてゆきあひたりしかば、いつよりも心ばそげにうちなげきて、『明日のいくさには、一定討たれなんずとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、人はいかがし給ふべき』なんと言ひしかども、いくさはいつもの事なれば、一定さるべしと思はざりける事のくやしきよ。それをかぎりどに思はましかば、などのちの世とちぎらざりけんと、思ふさへこそ悲しけれ。ただならずなりたる事をも、日ごろは隠して言はざりしかども、心強う思はれじとて、言ひいだしたりしかば、なのめならずうれしげにて、『通盛すでに三十になるまで、子といふものの無かりつる。あはれ男子にてあれかし。うき世の忘れがたみにも思ひおくばかり。

越前三位通盛卿の侍に、君太滝口時員という者がいる。北の方の御舟に参って申したことは、「通盛様は湊川の川下で、敵七騎にとりかこまれて、お討たれになりました。時員も同じ場所で死んで、最後のお供をいたすつもりでしたが、以前からおっしゃていたのは『この私がどうなってもおまえは命を捨ててはならない。どうあっても生きながらえて、北の方のお世話をせよ』との仰せでしたので、つまらない命を捨てず、恥知らずにもここまで逃げてまいりました」と申しけれども、北の方はなんの返事もなさらず、衣を頭からかぶって横になられた。確かに討たれたとお聞きになったが、もしやまちがいでなかろうか、生きて帰ることもあるのではないかと、二、三日はちよっとの間、出かけた人を待つ気持ちでいらっしゃったが、四五日が過ぎたので、もしやまちがいではという期待も持てなくなって、ますます心細くなられた。ただ一人おそばに付いている乳母の女房も、同じ枕に横になり沈みこんでいた。

北の方は、夫が討たれたと知らされた(二月)七日の夕刻から、十三日の夜までは起き上がらなかった。夜が明けると十四日、八島に着こうかという日暮れからずっと横になっていたが、夜が更けるにしたがって船の中も静かになったので、北の方が乳母の女房に言うには、「通盛さまが討たれたと聞いても、本当のこととは思えずすごしてきたのに、この日暮れごろから、本当かもしれないと思うようになったの。いろいろな人が湊川とかいう川の河口のあたりで討たれたというけれど、その後生きている彼にあったと言う人は一人もない。明日出陣という夜に、仮の陣屋であつたとき、いつもより心細い様子で嘆いて『明日の戦さで、きっと討たれるような気がするのだ。私になにかあったら、あなたはどうなるのだろう』などと言ったけれど、戦さはいつもの事なので、きっと討たれるとは思わなかったことが悔やしい。二度と会えないと思ったなら、来世でも一緒になろうと約束したのにどうしてそうしなかったのだろうと思うことさえ悲しいの。妊娠したこともしばらく隠して言わなかったけど、頑なだと思われまいと思って、お話ししたら、それはそれはうれしそうで、『私は三十歳になるまで子というものがいなかった。ああ男の子だといいなあ。つらいこの世の忘れ形見と思っておくよ。

さて幾月^{いくつき}ほどになるやらん。心地^{こころ}はいかがあるやらん。いつとなき波の上、舟のうちの住ひなれば、しづかに身々とならん時もいかがはせん』なんと言ひしは、はかなかりける兼言^{かねこと}かな。まことやらん、女はさやうの時、十^{とお}に九つはかならず死ぬるなれば、恥ぢがましきめを見て、おなうならんも 心憂し。しづかに身々となつてのち、をさなき者をもそだてて、亡き人のかたみにも見ばやとは思へども、をさなき者を見んたびごとには、昔の人のみこひしくて、思ひの数はつもるとも、なぐさむ事はよもあらじ。つひには逃^{のが}るまじき道なり。もしふしぎにこの世をしのび過ぐすとも、心にまかせぬ世のならひは、思はぬほかのふしぎもあるぞとよ。それも思へば心憂し。まどろめば夢に見え、醒^さむればおもかげにたつぞかし。生きてゐてとにかくに人をこひしと思はんより、ただ水の底へいらばやと思ひさだめてあるぞとよ。

そこにひとりどまて嘆かんずる事こそ心苦しけれども、わらはが装束のあるをば取って、いかならん僧にもとらせ、なき人の御菩提をもとぶらひ、わらはが後生^{ごしょう}をもたすけ給へ。書きおきたる文をば都へ伝へてたべ」などと、こまごまとのたまへば、めのとの女房涙をはらはらと流して、「いとけなき子をもふりすて、老いたる親をもとどめおき、これまでつき参らせてさぶらふ心ざしをば、いかにばかりとかおぼしめされさぶらふらむ。御身^{おん}一つのこととおぼしめすべからず。しづかに身々とならせ給ひてのち、をさなき人をもそだて参らせ、いかならん岩木のはざまにて御様^{おんさま}をかへ、仏の御名^{おんな}をもとなへて、なき人の御菩提をもとぶらひ参らせ給へかし。御身を投げてもしなき事なり。うらめしうも承るものかな」とさめざめとかきくどきければ、北の方この事あしうも聞かれぬと思はれけん、「それは心にかはりてもおしはかり給ふべし。大かたの世のうらめしさにも、身を投げんなんといふ事は常のならひなり。されども思ひたつならば、そこに知らせずしてはあるまじきぞ。夜もふけぬ、いざや寝ん」とのたまへば、この四、五日は湯水をだにはかばかしう御覧じいれ給はぬ人の、かやうに仰せらるるは、

それで何ヶ月になるの。気分はどうだい。いつまで続くのかわからない波の上船の住まいなので、穏やかに出産するとき、わたしはどうか』などといったのは、もうしなくてもよい先々の心配ね。ほんとうかしら、女は出産のとき、十回に九回は必ず死ぬと聞くので、恥づかしい思いをして死んでしまうのもつらいわ。平穩に出産したあと、幼い子を育てて、亡くなった人の形見にしようとは思うけど、幼い子を見るたびに、あの人のことばかりが思い出されて、思いは深くなっても心が慰められることはたぶんないでしょう。最後はみんな死んでゆくんですよ。もしふしぎなことにこの世でひそかに生きながらえるとしても、思いどおりにならないこの世の慣らい、ほかの人と再婚させられることだってある。それを思えばつらいの。すこし眠ると夢に出てくる、目が覚めると面影が目^めに浮かぶのよ。生き続けてあの人のことを恋しく思うよりも、まっすぐ水の底に沈もうと心に決めたの。

乳母のあなたがひとり残って嘆くのかと思うと心苦しいけれど、私の装束があるのでそれを取って、どんな僧でもいいから与えて、亡き夫の菩提を弔い、私の後世を祈ってください。書いておいたこの手紙を都へ届けてください」など、細々とおっしゃったところ、乳母の女房は涙をはらはらと流して、「まだ幼い子どもを残し、年老いた親もおいて、ここまで着いてまいった私の気持ちを、どれほどのものとお思いになっているのでしょうか。あなたひとりの身におきたこととお思いになってはなりませんよ。平穩に出産なさったあと、幼い子をお育てし、どこか岩木のはざまで出家をし、仏の御名を唱えて、亡き人の菩提を弔いなさいませ。海に身を投げてはつまらないことです。恨めしいことをおっしゃいますね」と涙ながらにくどくど言うので、北の方はまずいことを言ってしまったと思ったのだろうか、「それは私の気持ちになって想像してみてくださいね。たいてい世の中がうらめしくなると、身を投げようなどというのはいつものことよ。でも本当に決心したなら、あなたにだまってやるわけじゃない。夜も更けたわ、さあ寝ましょう」とおっしゃったので、この四、五日は湯水さえ少しも飲もうとしない人が、このようにおっしゃるのは、

まことに思ひたち給へるにこそと悲しくて、「あひかまへて、思しめし立つならば、千尋の底までもひきこそ具せさせ給はめ。おくれ参らせてのち、片時もながらふべしとおぼえさぶらはず」などと申して、御そばにありながら、ちっとまどろみたりけるひまに、北の方やはら舟ばたへおき出でて、漫々たる海上^{かいしやう}なれば、いつちを西とは知らねども、月の入るさの山の端を、そなたの空と思はれけん、しづかに念仏し給へば、沖の白洲に鳴く千鳥、天のとわたる梶^{おと}の音、折からあはれやまさりけん、しのび声に念仏百返ばかり唱へ給ひて、「南無西方極樂世界教主、弥陀如来、本願あやまたず浄土へみちびき給ひつつ、あかで別れし妹背のなからへ、必ず一つ蓮^{はちす}に迎へ給へ」と、泣く泣くはるかにかきくどき、「南無」と唱ふる声ともに、海にぞ沈み給ひける。

一の谷より八島へおしわたる夜半^{やはん}ばかりの事なれば、舟のうち静まつて人これを知らざりけり。その中に楫^{かん}取の一人寝ざりけるが、見つけ奉って、「あれはいかに、あの御舟より、よにうつくしうまします女房の、ただいま海へ入らせ給ひぬるぞや」と呼ばはりければ、めのとの女房うちおどろき、そばをさぐれどもおはせざりければ、「あれよあれ」とぞあきれける。人あまたおりて、とりあげ奉らんとしけれども、さらぬだに春の夜のならひにかすむ物なるに、四方^{よも}の村雲うかれきて、潜^{かづ}けども潜^{かづ}けども、月おぼろにて見えざりけり。ややあつてとりあげたてまつたりけれども、はやこの世に亡き人となり給ひぬ。練貫の二衣に白き袴を着給へり。髪も袴もしほたれて、とりあげたれどもかひぞなき。めのとの女房手に手をとりくみ、顔に顔を押し当てて、「などやこれほどにおぼしめしたつならば、千尋^{ちひろ}の底までもひきは具せさせ給はぬぞ。さるにても今一度、もの一言^{ひとことば}おほせられて聞かせさせ給へ」と、もだえこがれけれども、一言^{いちげん}の返事^{へんじ}にもおよばず。わづかにかよひつる息も、はやたえはてぬ。さる程に春の夜の月も雲井にかたぶき、かすめる空も明けゆけば、名残はつきせず思へども、さてもあるべき事ならねば、浮きもやあがり給ふと、故三位殿の着背長^{きせなが}の一両のこりたりけるにひきまとひ奉り、つひに海にぞ沈めける。

ほんとうに決心したのだと悲しくて、「いいですか、心をお決めになったのなら、千尋の底まで私も連れて行ってくださいね。あなたに先立たれてしまったら、ほんのわずかな時間でも生きていけるとは思えません」などと言って、おそばにいたがちょっとうとうとしていたあいだに、北の方はそと船端に出て、広い海の上なので、どちらが西かもわからないけれど、月がしずんでいこうとする山の端を、西の空と思ったのだろう、静かに念仏なさと、沖の白州に鳴く千鳥、天の門わたる梶の音、ちょうどこの時だから胸にしみるのだろうか、声を抑えて念仏を百返ほど唱えて「南無西方極樂世界教主、弥陀如来、きつと願いどおりに浄土に導びき、いといい夫とともに、かならず同じ蓮に迎えてください」と泣きながら遠くにむかってくり返し、「南無」と唱える声とともに、海に沈んでいった。

一の谷から屋島へ渡る夜中ごろのことなので、舟の中は静まってだれもこれに気づかなかった。その中に寝ていなかった船頭の一人が見つけて、「あれはどうしたことだ、あの舟から、実に美しい女房が、たった今海に身を投げたぞ」と大声で叫んだので、乳母の女房がはっと目を覚まし、そばを探るけれど小宰相がいなかったので、「あれ、あれ」と茫然とした。人が大勢海に入って、引きあげようとするけれど、そうでなくても春の夜のならいで月が霞んでいるうえ、四方から雲が出てきて、潜っても潜っても、月がおぼろに薄暗くて見えなかった。しばらくたって引きあげたが、すでにこの世の人ではなくなっていた。小宰相は練貫の二衣に白い袴を着ていた。髪も袴も海水でぐっしり濡れて、引きあげたけれどおそかった。乳母の女房は手を握り、顔に顔を押し当てて「どうして、これほど思い切ったのなら、千尋の底まで連れて行ってくだらないのです。それにしても、もう一度、なにかひと言おっしゃって声を聞かせてください」と身をよじって訴えるけれど、ひと言もお返事はない。わずかにあった息も、すでに絶えてしまった。そうする間に春の夜の月も空にかたむき、かすんでいる空も明けてくるので、名残はつきないけれど、いつまでもそうしてられないので、亡骸が浮かんでくるとよくないので、亡き三位殿通盛の着背長(鎧)が一つ残っていたのを着せて、とうとう海に沈めた。